

李輔亨先生を紹介する

植村 幸生

李輔亨（イ・ボヒョン）先生は、現在の韓国で最も尊敬されている音楽学者の一人である。李恵求、張師勳の両先生を韓国音楽学の「第一世代」とすれば、李輔亨先生は韓国音楽学の「第二世代」にあたるが、先生はそのなかでも、民俗音楽・芸能の徹底的な現地調査、そしてその成果に基づく伝統音楽の新しい理論化（先生の言葉を借りれば「文法体系」の提示）の面で、画期的な成果を挙げた。

李輔亨先生はまず何よりも、比類なきフィールドワーカーとして、それまで手つかずであった韓国の民間の音楽文化、特にパンソリ、散調、農楽（プンムル）、民謡、そして巫俗音楽に、研究の先鞭をつけた。民俗音楽の文化的価値を韓国の人々が認識するようになったのは李先生のお仕事によってであった、といっても過言ではない。先生は1960年代以降、全国各地を訪ね、録音およびインタビューを数多く果たしてきた（先生が録音した音源の一部は学術誌『韓国音盤学』の付録CDとして復刻公開されている）だけでなく、金命煥氏にパンソリ鼓法を、鄭權鎮氏にパンソリをそれぞれ師事するなど、パンソリとその演者の世界に対する広義のフィールドワークを長く続けた。民俗音楽における地域ごとの文化圏の存在、そして音組織におけるその文化圏ごとの特徴を「トリ」と称するという考え方は、現在では国楽研究の常識となっているが、これは李先生の研究によって明らかにされたことである。また、現地の用語、イーミックな概念を尊重するという研究態度も、当時の韓国では非常に先駆的であった。

1990年代以降は、それまでの現地調査の成果に基づいて、民俗音楽文化に重きをおきながら韓国伝統音楽の全体を射程に収める新しい理論の構築に取り組んできた。たとえば地域ごとに考えられた「トリ」の概念を洗練させ、「京西トリ」と「東南トリ」の二元論を提唱することで、ここに従来の正楽の音組織論も包含させるという議論を展開した。またチョムスキーの生成文法のアイデアを援用したチャンダンの類型化と生成論も提起している。

1990年代以降の先生のもう一つのお仕事は、韓国におけるレコード（特にSPを中心とする古音盤）研究に学術的な枠組みを与えることであった。自ら膨大なレコードの収集家でもある先生は、韓国古音盤研究会を立ち上げ、その会長職にある。この研究会からは若い世代の研究者が続々と現れているだけでなく、近年では同研究会を含むかたちで東アジア諸国にまたがる音盤研究、音楽産業研究が進められるようになっている。

李先生が民俗音楽調査に取り組んだ1970～80年代には、韓国における軍事政権と反体制運動との深刻な対立が続いていたが、急激な近代化、都市化とともに忘れられつつある民俗文化への再評価が進んだ時期でもあり、反体制運動の文化的展開として、さまざまな社会運動における民俗文化の引用、応用が試みられた時期でもあった。先生の業績が早くから注目を浴びた理由には、当時の若い世代における民俗文化に対する高い関心と熱意があったことは明らかである。

しかし李先生ご自身は、そうした政治的な動向に左右されることなく、淡々と、そして純粋に研究に打ち込んできた。それは伝統的な文人精神を彷彿とさせるものであるが、実際、先生は音楽のみならず、伝統絵画、篆刻、書芸、茶道にも造詣が深いのである。その自由闊達な精神は、若い研究者に対する実に気さくでオープンな態度にも表れている。先生はいくつかの大学で（現在もなお）非常勤講師を続けてきたが、そこで先生の講義を受けた学生や、民俗音楽の研究を志す者を、しばしば自宅に招き、研究上の便宜を惜しみなく与えてきた。現在の韓国で民俗音楽研究に携わる者のほとんど全員が、何らかの形で李先生の学恩を受けているといつてよく、その意味で李先生は韓国民俗音楽研究の父と呼んでもよい存在なのである。筆者自身、ソウル市内の、どことなく下町の雰囲気を残す住宅街にある李先生のご自宅を二度訪問したが、二度目の訪問では、筆者の無理な依頼を快く受け入れ、先生とともに巫俗音楽家へのインタビューをする機会を作ってくださった。いまここで、その好意に厚く感謝申し上げたいと思う。

ごく最近（2011年）、李先生のライフヒストリーが一冊の本となった。国立国楽院が刊行した『口

述叢書』シリーズの第二巻である（国楽院のサイトからPDFファイルとしてもダウンロード可能である）。生い立ちから学問的形成、当時の国楽界と名人たちとの出会い、理論的課題などを語り尽くしている同書は、李先生の人となりを知ることができるだけでなく、韓国伝統音楽の現代史を物語る資料として、これから活用されていくだろう。

李先生はこれまでに二百篇以上の論文、報告書を著しているが、報告書は官公庁発行物とあって入手は難しく、論文も最近のものを除くと入手がやや難しくなっている。またその著作の大半が韓国語で、他国語で発表されたもの、翻訳されたものはごく少数にすぎない。今後、その著作が集大成されるとともにそれらが翻訳されて、李先生の圧倒的な業績と、そこからにじみ出るお人柄が、世界に広く知られるようになることを、後学の一人として願ってやまない。

(東京藝術大学教授)

李輔亨氏の履歴

1937年 12月 11日	韓国全羅北道金堤生まれ
1969-1971	羅運榮に作曲を師事
1971	延世大学校大学院修了
1972-1999	文化財庁文化財専門委員
1973-1976	金命煥、鄭權鎮にパンソリ鼓法およびパンソリを師事
1974-1983	国立文化財研究所常勤専門委員
1975-2005	ソウル大学校音楽大学および大学院講師
1986-2005	漢陽大学校音楽大学および大学院音楽学科講師
1989	永同蘭溪音楽賞受賞
1990-1993	パンソリ学会会長
1990-現在	韓国古音盤研究会会長
1993-現在	韓国学中央研究院大学院講師
1998-現在	韓国洞簫研究会会長
2004	KBS 国楽大賞受賞
2008-現在	釜山大学校大学院音楽学科講師
2009	朝鮮日報国楽大賞受賞

李輔亨氏の主な業績

Main works of Mr. LEE Bo-Hyung

- 1969 “Melodic Patterns of *Otmori* Music Used in Shamanistic Song, *Pansori* (Dramatic Song) and *Sanjo* (Instrumental Music) 巫歌와 판소리와 散調에서 엇모리 가락의 比較”, *Essays in Ethnomusicology: A Birthday Offering for LEE Hye-ku* 李惠求博士頌壽記念音樂學論叢, Korean Musicological Society 韓國國樂學會.
- 1971 “The Shamanistic Music in *Shinawi* Area 시나위圈의 무속음악,” *Munhwa-illuhak* 文化人類學, 4.
- 1974-83 *Report of General Research in Folklore of Korea* 韓國民俗綜合調查報告書. Administration Bureau of Cultural Properties 文化財管理局.
- 1975 “Composition of Rhythmic and Modal Patterns According to Dramatic Situation in the Text of *Pansori* 판소리 辭說의 劇的 狀況에 따른 장단 調의 構成,” *Bulletin of The Korea Arts Academy* 芸術院論文集, 14.
- 1981 “Ritual Ceremonies of Village *Kut* and *Ture Kut*, a *Kut* for the Spirit of Agriculture 마을굿과 두레굿의 儀式構成,” *Minjok Umakhak: The Journal of Asian Music Research Institute, Seoul National University* 民族音樂學, 4.
- 1982 “A Study of *che* [schools] in *Pansori*, 판소리 ‘制(派)’에 관한 研究” *Anthology of articles in Korean Musicology* 韓國音樂學論文集, Academy of Korean Studies 韓國精神文化研究院.
- 1990 “A Study of *Gwangdae Sori* Performed by *Chang-u* [entertainer] Groups 倡優集團의 廣大 소리 研究,” *Studies in Korean Traditional Music* 韓國傳統音樂論究, Korean Culture Institute, Koryo University 高麗大學校民族文化研究所.
- 1992 *A Study of Melodic Structures of Folk Song in Seodo (North-Western) and Gyonggi (Central) Areas* 西道民謠와 京畿民謠의 旋律構造 研究. National Institute of Cultural Properties 文化財研究所.
- 1995 “The Rationality and Usability of Rhythmic Grouping and Division in Korean Traditional Theories of Notation 傳統記譜論에서 拍의 集合論과 分割論에 대한 合理性和 效用性,” *Minjok Umakhak* 民族音樂學, 17.
- 1997 “A Musical Study of *Arirang*’s Origin and Changes 아리랑 소리의 根源과 變遷에 관한 音樂的研究,” *Studies in Korean Folk Song* 韓國民謠學, 5.
- 1998 “Generative and transformational Principles of “Surface Structure” Applied to the Korean *Changdan*-rhythm 장단 리듬 表面構造의 生成, 變形原理,” *Journal of the National Center for Korean Traditional performing Arts* 國樂院論文集, 10.
- 2002 “The Types and Characters of Classical Vocal Singer Groups in the Late Choson Dynasty 朝鮮後期 正歌集團의 類型과 性格,” *Tongyang Umak* 東洋音樂, 24.
- 2011 “A Study of Acceptance and Development of the Central-Asian *Chok* (flute)’s *Ch’ilcho* System in China and Korea 韓國, 中國의 西域笛 7調 受容과 變遷에 대한 研究,” *Journal of the Society for Korean Historico-Musicology* 韓國音樂史學報, 46.